

ケニアのイスラム圏における初等教育普及の現状と課題 コースト州ラム島の事例

澤村 信 英

(広島大学教育開発国際協力研究センター)

内 海 成 治

(大阪大学大学院人間科学研究科)

1. はじめに

ラム島はコースト州(Coast Province)ラム県(Lamu District)に含まれ、住民の多くはイスラム教を信仰し、その社会文化は内陸(高地)部と異なっている。ラム県の北端は半乾燥地であるノースウェスタン州(North Western Province)に接し、東部は隣国ソマリアに近接している(図1)。筆者らは、2000年からナロック県を中心に初等教育に関連する調査を進めているが、その普及において内陸部とは異なる状況や課題があるのではないかと考え、2001年7月に初めてラム島を訪問し、ごく予備的な調査を行った。

今般、2006年7月5日～8日、2007年1月10日～19日および7月8日～16日の3回にわたりラム島でのフィールド調査を実施し、伝統的な社会における初等教育のあり方について、特にこれまでのナロック県での調査結果と比較しながら、関連情報の収集および教師を中心とする関係者とのインタビューを行った。

本調査を始めるきっかけとなった関心は、主に次の2点である。

(1) これまで調査を行ってきた牧畜遊牧民が多いナロック県と自然・文化的環境が異なる海岸部にあるイスラム圏のラム県を比較すれば、初等教育普及のメカニズムに新たな視点を提供してくれるのではないか。

(2) マドラサ(イスラム学校)と公立小学

校の関係はどうなっているのか。小学校には行かないが、マドラサだけに通っている子どもが多いのではないか(すなわち、教育は受けているが統計上の「就学者」には数えられていない)。

さらに調査を進めるに従って出てきた疑問として、

(3) 通学圏内に複数の小学校が存在する場合、保護者はどのようにして子どもの学校を決めているのだろうか、というものである。

データ整理が不十分なところもあるが、現在並行して実施中の学校をベースとした生

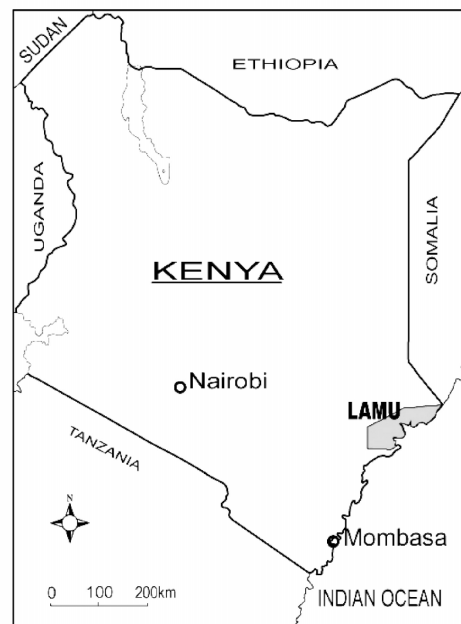


図1 ラム県位置図

徒、保護者、教師などへのインタビュー調査の前段として、既存資料を中心とした数的なデータから、ラム島における初等教育普及の現状と課題を報告する。まず、ラムの地理と教育の概要を紹介し、具体的な小学校およびマドラサの現状を中心に議論を進める。なお、引用する文献は、就学者数などの教育統計の他、初等教育修了試験 (KCPE: Kenya Certificate of Primary Education) の成績に関連する資料が多いが、これは初等教育が受験中心であるため(澤村 2006)、文献資料として入手可能なものが試験の成績に関するものが多いことに関係している。

2. 地理

ラム島は、コースト州の最大都市モンバサ (Mombasa) の北西 300km に位置する。その歴史は 14 ~ 15 世紀にさかのぼり、中東との貿易の拠点として栄え、今もスワヒリ文化 (アフリカとアラブの文化が融合したもの)

を色濃く残し、その街並みはユネスコ文化遺産に指定 (2001 年) されている。この旧市街には中世イスラムの世界が残っていると評され、細い路地が迷路のように入り組んでおり、あちこちにモスクがある。島には県知事用の公用車が 1 台あるだけであり、主な移動手段は徒歩かロバである。本土からの転入者を除けば、島民のほとんどはイスラム教徒 (モスLEM) である。ナイロビからは空路、約 2 時間 (マリンディ経由) でラム島の東隣、マンダ (Manda) 島にある空港に到着する。

ラム県は、図 2 のとおり、5 つの行政区 (Division) から成り、ラム島は本土のモコウェ (Mokowe) およびヒンディ (Hindi) などの町を含む南北に長いアム区 (Amu Division) に属している。モンバサから陸路でラム島へ入ると、まずウィツ区 (Witu Division) およびムペケトニ区 (Mpeketoni Division) を通り、次がアム区である。モコウェからさらに船に乗り、約 30 分でラムに到着する。その他の 2 つの区は、ラム島東部

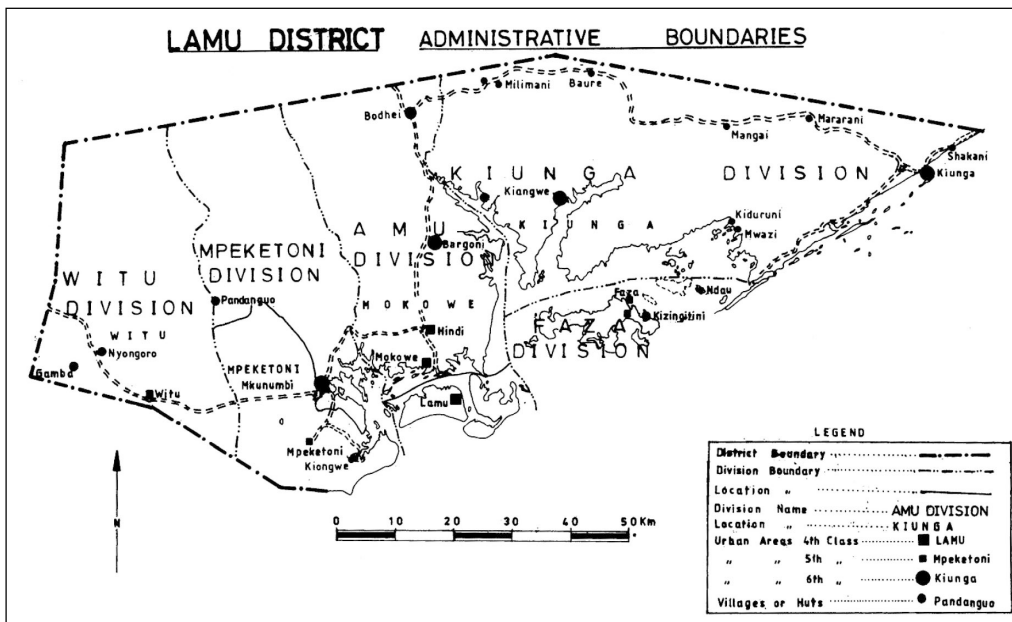


図 2 ラム県の行政区分と主要な町
(出所) Republic of Kenya (1997, p.7)

のパテ(Pate)、ンダウ(Ndau)などの島嶼を含むファザ区(Faza Division)および本土部分のキウンガ区(Kiunga Division)である。キウンガ区の東端はソマリアに近接している。

3. ラム県の教育概要

(1) 小学校・中等学校

初等教育就学率としては州別のものがあるが、県別までの詳細なデータは教育省より一般には公表されていない。UNDP(国連開発計画)ケニア事務所が作成した『ケニア人間開発報告書2001』に収録されている県別就学率(1999年)によれば、ラム県の初等教育総就学率は89.0%であり、コースト州平均(72.3%)およびケニア全国平均(81.9%)に比べても高い(UNDP Kenya 2002, p.96)。ラム県の中等教育総就学率(14.7%)は、コースト州(17.0%)およびケニア(22.8%)のそれぞれの平均に比べ逆に低くなっている(Ibid.)。従って、中等教育へのアクセスは限られているが、初等教育の量的な普及は他県に比べて進んでいることがわかる。

ラム県は、便宜上4つの教育区に分割されており、行政区として存在するキウンガはファザに含まれている。この教育区別の小学校数、就学者数などは、表1のとおりである。アムとムペクトニの面積および人口は大きく

変わらないが、ムペクトニは内陸部からの移住者(クリスチャンが多い)が住み、比較的土壌が肥沃な地域である。そのため、小学校数および就学者数が他地区より多く、かつ男女間の就学格差も比較的小さい。またKCPEの平均点も比較的良好である。公には中等学校へ進学するには、男子の場合は230-250点、女子の場合は210点程度が必要だと言われているが、実際の進学は中等学校校長の裁量にゆだねられる部分もあり、授業料さえ払える経済力が保護者にあれば、KCPEの得点が低くとも受け入れられることが多い。

ラム県には2007年7月現在、11の中等学校があり、基本的に各区に最低1校ある。アム区はラムに男子校と女子校の2つがあるが、他の3区は男女別クラス編成の共学校である。一番人気の高い学校は、ムペクトニ中等学校(全寮制)である。ムペクトニ区には前述のとおり小学校の数も多いが、中等学校に関しても、私立2校、および選挙区開発基金(Constituency Development Fund: CDF)によりコミュニティーが中心となり最近建設された公立3校も同地区にある(ただし、うち2校は生徒数が10人、16人という小規模の発展途上の学校であり、教育省に正式には認可されていない)。

ラム県の小学校および中等学校の就学者数は、ケニア全体の増加率以上の割合で近年増えている(表2)。特に、2003年の初等教育

表1 ラム県の地区別小学校概要およびKCPE成績(2006年)

地区 (Division)	学校数	生徒数 (男/女)	KCPE 受験者数	KCPE 平均点
アム(Amu)	16+私立4	5,792 (3,039/2,753)	503	211.21
ウィツ(Witu)	9	2,609 (1,416/1,193)	190	202.36
ムペクトニ(Mpeketoni)	30	8,419 (4,240/4,179)	712	243.47
ファザ(Faza)	15	4,174 (2,199/1,975)	208	228.30
計	70+私立4	20,994 (10,894/10,100)	1,613	226.61

(注) KCPE平均点は500点満点。

(出所) ラム県教育事務所資料

表2 初等・中等教育就学者数の推移（ラム県およびケニア全国の比較）

段階	地域	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
初等教育	ラム県	15,793 (100)	17,953 (113.7)	19,010 (120.4)	20,023 (126.8)	21,224 (134.4)	21,459 (135.9)
	ケニア 全国	6,062,900 (100)	7,159,500 (118.1)	7,394,700 (122.0)	7,591,400 (125.2)	7,632,200 (125.9)	未公表
中等教育	ラム県	1,358 (100)	1,554 (114.4)	1,575 (116.0)	1,748 (128.7)	2,134 (157.1)	2,472 (182.0)
	ケニア 全国	778,601 (100)	882,513 (113.3)	926,150 (119.0)	934,149 (120.0)	1,030,080 (132.3)	未公表

(注) カッコ内は、2002年就学者数（2003年の無償化以前）を100とした場合の指数。

(出所) ラム県教育事務所資料およびKenya National Bureau of Statistics (2007, p.45)を参考に作成

無償化以降、授業料が原則無償になったことに加え、自動進級がより厳格に実施されることになった。また、政府の2008年までに中等教育への進学率を70%にするという数値目標とも相まって(Ministry of Education, Science and Technology 2005)、中等学校就学者数の伸びはラム県において著しい。

(2) 初等教育修了試験(KCPE)の成績

教育の概要を紹介するために学力検査の結果だけを使うことは適当でないが、教育の質に関係するデータとしては、比較的信頼できるものである。ラム県の教育関係者にとって衝撃だったのは、2006年のKCPEの結果が、全国76県のうち第73位であったことである(表3)。生活の困窮度だけがラム県の成績が低い理由でないことは、より貧困度の高い県の成績がそれほど悪くないことからわかる。中等学校に女子は通わせないという伝統が一部にあり、それが男女間のKCPE得点差につながっていると言う関係者もいる。日常の食べ物には困らない「豊かさ」が教育に対する期待を逆に低くさせていると解釈する向きもある(ラム県教育事務所)。

一方で、このKCPE県別順位の低下は、全国的な受験者数の推移とラム県のそれを比較すると興味深い点がわかる。2006年のラム

県の受験者数は前年に比べて14%増加しているが、ケニア全体の受験者数は逆に同時期に671,550人から666,451人へわずかではあるが減少している(Kenya National Examinations Council 2007)。ラム県の受験者数より少ない県はわずか4県のみであり、受験者数の増加、すなわち故意に成績不良者を留年させるなどの措置を採っていないために平均点が低下したと肯定的に理解することもできる。従って、ラム県の小学生が特別に質の悪い教育を受けているわけではないだろう。

このような試験結果を受け、2007年1月16日、ラム県教育事務所はアム区の全公立小学校長を招集し、KCPE成績の向上のための方策等を議論した。その内容は次のようなものであった。私立校の校長は参加していない。

ラム県でKCPE平均の最高得点を取ったレイクケニヤッタ(Lake Kenyatta)小は通学生だけの公立校で、79人もが受験している。ムベクト二(本土にあるラム県最大の町)に所在するというだけが好成绩の理由でもない。レイクケニヤッタ小は入学の際に優秀な子どもだけを選抜しているのではないかとする疑念の声も上がったが、総じて他の学校では、教師の力量、コミットメントの低さが問

表3 ラム県のKCPE 受験者数および成績の推移

年	受験者数 (男/女)	KCPE平均素点 (男/女)	平均素点 (370点満点)	県別順位
2002	1077 (583/494)	185.70/174.08	179.58	55位 (75県中)
2003	1283 (700/583)	180.25/166.56	174.03	38位 (74県中)
2004	1286 (714/572)	171.27/163.77	167.95	58位 (74県中)
2005	1430 (766/664)	183.23/173.05	178.50	55位 (76県中)
2006	1629 (914/715)	183.40/170.38	177.68	73位 (76県中)

(注) 素点は370点満点。通常の得点は、各教科100点満点として再計算し、5教科500点満点となる。県数は、分割・統合などが行われるため、一定していない。

(出所) Kenya National Examinations Council (2003, 2004, 2005, 2006, 2007)

題だとする意見が多かった。授業の改善などについて教師間で合意はするが、実行しないという批判も出た。

ラム(Lamu)小の校長(アム区の公立小学校長の中で唯一のクリスチャン)が高学年でマドラサへ行くことが学習時間を減らしているという意見を出したところ、アマ(Ama)小などのモスレムの校長は一斉に反発した。ンデウ(Ndeu)小などからは、児童労働、教員不足の問題が指摘された。シェラ(Shela)小は今回のKCPE成績は良かったが、男子の成績が概して良くなく、その理由はビーチで小金を稼げるからだとの話が出た。マンダ(Manda)小は、貧困から朝食を食べてこない子どもが多いと発言があった。ムコマニ(Mkomani)小からは、KCPEの成績を向上させるのであれば、ナーサリーに行った子どもだけを入学させなければならないとの率直な意見が出された。結論としては、ムペケトニの成績優秀校を見学し、それから再度会合をもつことで散会した。県教育事務所からは、教師がチームとして働くこと、7～8年だけの問題ではなく低学年が大切であること、教員の管理などについて言及があった。

4. ラム市街の小学校

(1) 各学校の位置と生徒数

ラム市街には公立小学校4校および私立小学校3校がある。ラム市街から徒歩45分の距離にあるシェラ小を含めると公立5校、私立3校がラム市街地に住む子どもたちが通える学校である。それらの小学校の学年別生徒数の推移(2005～2007年、私立校は2006年のみ)を整理すると、表4のとおりである。2003年の無償化以前より政策としては自動進級が原則であったが、無償化以降、その実施がより厳格に行われるようになった。それでも留年はあり、また生徒の転校も起こるため、この表を見ればわかるように、生徒すべてが翌年になれば新しい学年に進級しているわけではない。特に、高学年では生徒数の変動が著しい。また、各校の位置は、図3のとおりである(これら8校に加え、ラム島にある他の2校も含む)。

(2) 各学校の特徴

ラム市街から通学圏にある小学校8校について、それぞれの特徴や学校経営、校長自身のキャリアなどにつき、既存資料からの確認や校長等にインタビューを行った結果、次のとおりである。各校訪問の目的は一定しておらず、質問内容はあえて構造化していないた

表4 ラム市街から通学可能な小学校の学年別生徒数・教師数・KCPE成績等 (2005～2007年)

学校名	調査年	計										教師		KCPE	
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	人数	宗教	平均	ラム島順位 (受験者数)		
①Shela	2005	35(14)	29(13)	30(12)	25(11)	28(14)	34(13)	29(15)	24(10)	234(102)	8(2)	1/7	239	30/59(26)	
	2006	32(13)	34(15)	37(19)	26(10)	22(11)	25(14)	32(11)	27(16)	235(109)	8(3)	1/7	261	10/63(27)	
	2007	22(16)	35(13)	35(14)	36(19)	21(11)	20(8)	24(11)	29(11)	222(101)	8(4)	1/7	
②Lamu	2005	132(0)	116(0)	147(0)	129(0)	80(0)	81(0)	89(0)	71(0)	845(0)	25(14)	3/22	221	42/59(67)	
	2006	112(0)	130(0)	112(0)	131(0)	120(0)	89(0)	98(0)	62(0)	854(0)	23(14)	3/20	215	37/63(67)	
	2007	121(0)	123(0)	122(0)	125(0)	117(0)	113(0)	74(0)	71(0)	867(0)	23(12)	5/18	
③Mkomani	2005	131(131)	179(179)	181(181)	120(120)	95(95)	117(117)	90(90)	95(95)	1008(1008)	26(18)	3/23	214	45/59(89)	
	2006	150(150)	142(142)	160(160)	179(179)	108(108)	101(101)	113(113)	90(90)	1045(1045)	25(17)	2/23	215	42/63(73)	
	2007	144(144)	137(137)	133(133)	140(140)	165(165)	102(102)	95(95)	128(128)	1044(1044)	24(17)	3/21	
④Ama	2005	50(0)	45(0)	48(0)	40(0)	28(0)	29(0)	32(0)	24(0)	296(0)	9(4)	2/7	237	34/59(20)	
	2006	41(0)	51(0)	51(0)	49(0)	36(0)	30(0)	34(0)	33(0)	324(0)	12(6)	2/10	218	39/63(30)	
	2007	51(0)	51(0)	60(0)	58(0)	48(0)	36(0)	31(0)	36(0)	371(0)	12(6)	1/11	
⑤Wiyoni	2005	90(49)	102(55)	92(34)	62(27)	79(42)	49(26)	53(23)	51(27)	578(283)	15(5)	1/14	230	37/59(48)	
	2006	91(38)	67(32)	86(47)	91(40)	43(21)	65(34)	56(18)	53(20)	552(250)	15(6)	1/14	201	47/63(49)	
	2007	72(41)	79(36)	64(34)	75(40)	76(37)	42(23)	63(34)	45(14)	516(259)	15(7)	2/13	
公立校計	2005	438(194)	471(247)	498(227)	376(158)	310(151)	310(156)	293(128)	265(132)	2961(1393)	83(43)	10/73	249	21/63(25)	
	2006	426(201)	424(189)	446(226)	476(229)	329(240)	310(149)	333(142)	265(126)	3010(1404)	83(46)	9/74	261	11/63(5)	
	2007	410(201)	425(186)	414(181)	434(199)	427(213)	313(133)	287(140)	309(153)	3020(1404)	82(46)	12/70	
⑥LamuAmani*	2006	17(8)	12(3)	17(10)	16(8)	11(3)	20(14)	17(7)	26(13)	136(66)	8(3)	8/0	249	21/63(25)	
⑦ImaraDaima*	2006	10(5)	9(5)	13(7)	13(7)	6(3)	10(7)	5(4)	5(4)	71(42)	7(3)	7/0	261	11/63(5)	
⑧StoneTown*	2006	31(11)	19(7)	30(20)	22(9)	28(17)	130(64)	5(3)	3/2	
私立校計	2006	58(24)	40(15)	60(37)	51(24)	45(23)	30(21)	22(11)	31(17)	337(172)	20(9)	18/2	

(注) 使用したデータは、各校からラム島教育事務所/教育省に提出された「学校データ報告 (5月分)」およびラム島教育事務所で作成された資料による。カッコ内は女性の内数。教師の宗教は(イスラム教/キリスト教)で表している。学校名に*印を付した学校は私立校であるが、データは2006年分のみ。学校名に付した番号は、図3の学校位置図のそれに対応している。

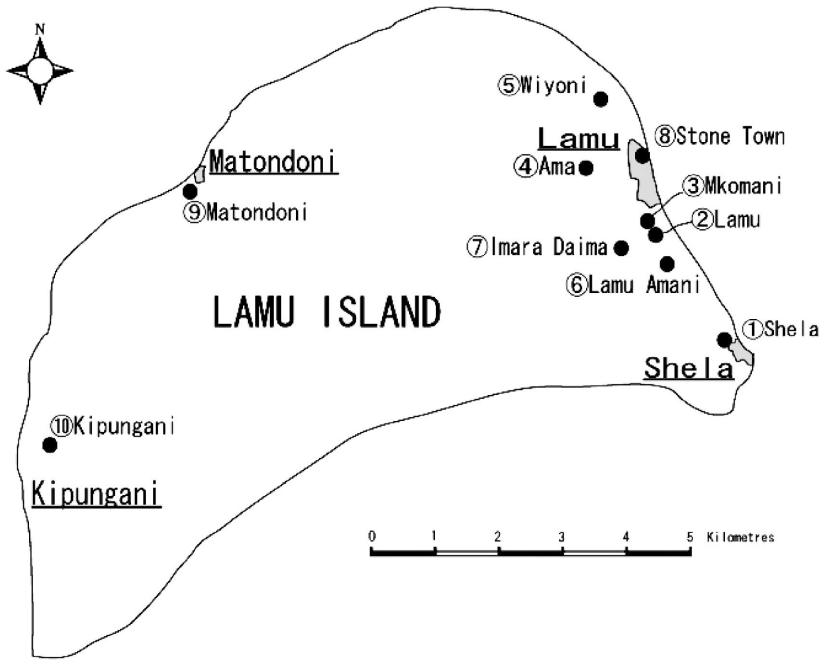


図3 ラム島内の小学校位置図

(注) 学校名に付した丸番号は、表4の学校名に対応している。

め、その内容は学校ごとに濃淡がある。

シェラ (She la)

ラム市街から南へ海岸沿いを歩き、45分ほど離れたシェラの町の高台にある。海岸部にはリゾートホテルが建ち並び、現金収入があり比較的裕福な地域だと言われている。町は小さく、保護者の学校活動への参加も協力的である。生徒の制服のきちんとしており、他の小学校との違いが良くわかる。高学年ではラム市街から通学する生徒もいるが、低学年はすべてシェラの町から来ている。

2006年のKCPE成績が良かったのは、その学年は1～3年生から規律があり、基礎学力がついていたからである。重要なのは低学年であり、この段階でしっかり勉強できていれば、高学年になっても成績は安定している。同一学年で年齢にバラツキが少なく(た

例えば、ウィヨニ小はそれが大きい) また全員がプレスクールを経て入学してくるので教えやすい。

ラム (Lamu)

1946年にアラブの学校として設立された。この地域で最古の小学校で男子校である。その当時は、ザンジバルから教師が来ていた。ラム市街の南のはずれにある。現在の校長は、この地区の公立校では唯一のクリスチャンである。キスム(ケニア西部)出身であるが、1995年に教員養成校を卒業してからこの学校で働いている。

他校でも8年生に対する補習を週末などに行っているが、ここでは土曜日の朝7時から12時半に行っている。保護者から集金し、担当する教師に月額2,500シリング(35ドル)を支払っている。ムコマニ小(女子校)およびラム男子中等学校に隣接している。

ムコマニ (Mkomani)

1974年に開校したこの地区唯一の女子校である。ラム小のすぐ隣に位置している。最近、アメリカ海軍の支援で教室などの建物を改修したが、机や椅子が不足している。生徒の10～20%がクリスチャンであるが、残りはモスLEMである。2006年のKCPE平均点は良くなかったが、国立中等学校に3人が進学した。この背景には、県ごとに男女別に最低の割当数(クォーター)があるため、例えば、ラム島の女子であれば330～340点で国立校に進学可能である(ナイロビからであれば最低400点必要)、生徒数は千人を超えており、ラム島で最大規模の学校である。

アマ (Ama)

ラム市街から内陸部(西)へ20分程度入った場所にある。ラム女子中等学校に隣接している。1997年に新設された比較的新しい男子校である。この近辺に住宅はなく、ほとんどすべての子どもは街から通っているが、42名(2007年)の孤児を寮生として預かっている。

ウィヨニ (Wiyoni)

市街地の北端から徒歩15分程度の海沿いにある。生徒の10～20%がクリスチャンで残りはモスLEM(5年生のクラス49人に確認したところ、6人だけがクリスチャンであった)である。クリスチャンの生徒は大部分がモンバサやマリンディ(海岸部の主要都市)の出身である。高学年では男女別のクラス編成をしているが、教師が休みなどの場合は混合で授業をしている。

校長(2007年1月当時、7月までに異動)が教員組合の主要メンバーで、保護者会との間で摩擦がある。銀行口座には40万シリング(5～6000ドル相当)があるが、引き出すには校長と学校運営委員会委員長2名の署名が必要で、そのため教科書を購入することもできない。

ラムアマニ (Lamu Amani)

市街からシェラへの海岸沿いの道を20分

程歩き、その途中を内陸方向に5分ほど入った少し奥まった場所にある。1997年に開校した。2006年まで教師全員がクリスチャン(プロテスタント)であったが、2007年からラム女子中等学校を退職した教師がイスラム教を教えている。生徒の70%がクリスチャンとのことであり、実際に1年生16人のうち11人がクリスチャンであったので、この割合に大きな間違いはない。

授業料は1～3年生3,000シリング、4～7年生4,000シリング、8年生4,500シリングを毎学期徴収している。校名のAmaniはスワヒリ語で「平和」を意味している。

イマラダイマ (Imara Daima)

2003年に開校し、2年生2人から始めた。建物は子どもの背丈程度の壁から棒を伸ばしヤシの葉で天井を作った簡素なものである。教師のすべてがクリスチャン(カトリック)である。モスLEMのコミュニティーに土地を借りているが、協力的で反対はなかった。授業料は1～5年3,000シリング、6～7年3,500シリング、8年4,000シリングを毎学期集めている。現在すでにいる高学年の生徒は、ラムのさまざまな小学校からの転入生である。

KCPEの成績が良いのは、少人数クラスだからではない。教師のコミットメントの違いである。保護者から授業料を徴収するのだから、より勤勉に働かなければならない。子どもの学習効果が実際に見えてくると、授業料が必要だからといって転校させる保護者はいない。学校は校長のマネージメント次第である。校名のイマラダイマは、スワヒリ語で「いっしょに」と意味している。

ストーンタウン (Stone Town)

2006年に開校したが、前述のキリスト教系私立校(キリスト教の教義に基づく教育を行うためではなく、ビジネスとして個人が開校している)と異なり、モスLEMにより経営がなされている。1クラス、原則30人以下のクラス編成をしている。共学ではあるが、

机の並べ方で男女別になっている。校長はアップランド（内陸部の高地）の出身であるが、ラムが気に入り、2002年から2005年までラムアマニ小で教師をしていた。2006年に校長職の公募があり、それに応募し採用された。校長の月給は10,000シリング（他の教師は9,000シリング）で、公立校に比べても決して良くない。

校長や教員はイスラム教を教える一人を除いてクリスチャンであるが、生徒の90%はモスLEMである。授業料は入学料1,500シリング、每学期3,000シリング（1～5年生）を徴収している。2007年に50人の入学希望者があったが、36人を選抜した。街中にある学校で通学が安心であるため女子の割合が多い。

（3）生徒の学校間の移動（転校）

学区のある日本等と異なり、生徒はさまざまな理由により転校をしている。従って、1校だけを観察していても生徒の動きはわかりにくく、学校間の相互作用に目を向ける必要がある。KCPEの結果により学校の質や校長・教師の能力が評価され、また私立校にとっては、KCPEの結果が入学、転入する生徒の質、学校経営に大きな影響を与える。言ってみれば、いかに学業成績の上がるポテンシャルのある子どもを受け入れるか（あるいは、その可能性の低い子どもを受け入れないか）が重要になる。

住居は同じでありながら転校する子ども（子どもを転校させる保護者）の理由を調べれば、保護者がどのような情報あるいは条件に基づいて学校を選択するかがわかるはずであるが、量的にそのような子どもの数を把握するのは容易でない。なぜならば、学校ごとの転出、転入は必ずしもしっかりと把握されていないからである。本来、転出元の校長が転出先の校長に対して手紙を書かなければ転校は認められないことになっているが、それは必ずしも実践されていない。

転校する子どもの具体的事例としては、次のようなものがある。

KCPEを再受験するための転校:イマラダイマ小は2003年に開校したばかりであるが高学年で転校生を受け入れ、2006年のKCPE成績はシェラ小に次いで県内で11位であった。これは、受験生5人のうちの3人が、その1～2年前にウィヨニ小を卒業した生徒が再挑戦したためである（ウィヨニ小副校長談）。
留年を避けるための転校:ラム小で留年させられそうになるほど学習進度の遅かった生徒数名を2005年にウィヨニ小の7年生に受け入れた。その結果、ウィヨニ小のKCPE成績は2006年に低下した（ウィヨニ小副校長談）。

学校運営に問題ある学校からの転校:ウィヨニ小の校長と学校運営委員会の関係が悪く、2006年に約20人がムコマニ小へ転校した（ムコマニ小校長談）。ラムアマニ小（私立）においても学校経営上の問題でストーンタウン小（私立）に数名が転校した（ストーンタウン小校長談）。

公立校から私立校への転校:イマラダイマ小およびストーンタウン小は、それぞれ2003年および2006年に開校している。新たに開校すると公立校やラムアマニ小（私立であるが教師と経営者の関係が悪い）からも転入の希望者がある（イマラダイマ小校長談）。

（4）宗教の影響

モスLEMの保護者にとっては、女子であれば高学年で男子教師に教えられること、あるいは男女共に異教徒（クリスチャン）の教師に教えられることに一般に抵抗があると言われている。そうであれば、保護者にとって教師がクリスチャンかモスLEMであるかは、子どもの学校選択に大きく影響するはずであ

る。例えば、クリスチャンの教師が多い学校には、モスレムの保護者は子どもを送らないのではないかと、というものである。実際に、モスレムの保護者にインタビューすると、そのように回答する者が多い。公立校におけるクリスチャン教師の割合はごくわずかで大差はないが、私立校の場合、明らかにクリスチャンの教師が多く、私立校3校のうち2校は全教師がクリスチャンである。

公立校の場合、共学校の場合でも高学年になれば男女別の学級編成になる。仮に1クラスしかない場合でも、男女は基本的に隣同士にはならない。ストーンタウン小の場合、各学年1クラスの男女混合であるが、男子と女子の着席位置は、左右で完全に分かれている。他のキリスト教系の私立校では、そのような机の並べ方はしていない。

生徒のクリスチャンとモスレムの割合を調べてみると、公立校のウィヨニ小とムコマニ小の場合、クリスチャンの生徒の割合は10～20%である。一方、私立校のイマラダイマ小の生徒の70～80%はクリスチャンであり、残りがモスレムである。ラムアマニ小では70%程度がクリスチャンである。モスレムが経営母体であるストーンタウン小は、教師にもモスレムの割合が比較的大きく(クリスチャン3人、モスレム2人)、生徒の割合も70%がモスレムである。

学校教育の上で、キリスト教とイスラム教との間での軋轢はほとんどない雰囲気であったが、ラムアマニ小およびイマラダイマ小の場所は、市街地から徒歩20分ほど離れた不便な場所にある。その一方、モスレムの経営するストーンタウン小は、市街地の表通りの目立つところにある。私立小学校の校長(いずれもクリスチャン)にクリスチャンの学校にモスレムが通うことにモスレムの保護者の抵抗はないのかと質問すると、教育の質がよければ、宗教のことは関係なく、教育の質と通学距離により学校を選択しているとの回答であったが(イマラダイマ小およびストーン

タウン小学校長談)、これはクリスチャン側からの見方であろう。

総合すると、モスレムの保護者の多くにとって、クリスチャンの教師に子どもを任せることには抵抗があるが、一部の私立校に通わせるだけの経済力のある保護者は、教育の質(この場合、KCPEの成績)を優先した学校選択を行っているようである。

(5) 学校間の成績格差

KCPEの成績は、各学校の教育の質を測る目安として頻りに利用される。各県の教育事務所はこの学校別平均点に基づきランキングを作成するのが普通である。いわゆる教育の質を試験の成績で計測することの適否は別に、これ以上により適切な方法がないのも現実である。KCPEは小学8年生が受験する全国統一試験であるが、教育区の下位の行政区分としてゾーン(Zone)があり、このゾーンにおいては各学年、学期ごとに共通試験が実施されることが多い。

ラム島にある学校はキシワニ・ゾーン(Kisiwani Zone)に属しており、ラム市街の8校に加え、島の西側にあるマトンドニ(Matondoni)小およびキプンガニ(Kipungani)小、ならびにマンダ島(ラム島の東隣、空港がある)のマンダ(Manda)小が含まれる。これらの学校の4年生を対象とした共通試験の結果は、表5のとおりである。

まずはっきりしているのは、公立と私立間での成績の格差が歴然としていることである。参加11校のうち、上位3校はすべて私立であり、かつその両グループ間の得点差は、各教科すべてにおいて非常に大きい。4年生は教授言語が現地語(ラムの場合、スワヒリ語)から英語に代わる学年であり、これ以降、本格的なKCPE受験を目標とした学習が始まる。このような基礎学力の不足が高学年で回復することを期待するのは、彼らの家庭での学習環境を考えれば容易でないし、低

表5 ラム県キシワニ・ゾーンの小学校別共通試験成績（4年生対象、成績順）

学校名	受験者数	英語	スワヒリ語	数学	科学	社会	計
Lamu Amani	12	42.1	45.7	68.8	63.0	58.5	278.1
Stone Town	25	42.0	50.8	71.2	56.7	54.2	275.0
Imara Daima	13	49.8	55.4	63.5	49.8	53.2	271.7
Shela	26	31.5	44.7	59.8	35.8	46.3	218.1
Matondoni	52	40.8	44.1	50.2	37.3	41.2	213.6
Ama	50	32.8	48.9	47.3	38.2	43.5	210.7
Mkomani	171	32.0	43.6	46.2	34.1	40.5	196.4
Kipungani	13	31.5	39.3	45.1	33.4	36.6	185.9
Wiyoni	82	27.7	36.5	40.6	30.8	39.7	175.3
Lamu	121	25.7	28.8	40.4	34.0	40.5	169.4
Manda	8	21.0	35.3	36.5	34.5	34.1	161.4

(注) 2006年3学期末（11月）に実施。各教科100点満点、計500点満点。

(出所) ストーンタウン小学校資料

学年で学習の習慣をつけることが重要であることは、多くの校長が示唆している。この4年生は2003年の初等教育無償化により1年生に入学したグループであり、その影響がどのように成績に表れてくるかを知るためには、さらに多面的な調査が必要であろう。

私立校は学級規模が小さいからという理由だけで、この公立校との成績の差は説明できない。教師としての経験年齢は、私立校教師の方がはるかに少ない。例えば、同じクラス規模のストーンタウン小(私立)とシェラ小(公立)を比較すると、前者の私立校長は9～12年の経験があるものの、その他4人の教師は4年以下の教授経験しかない(2007年5月分「学校データ報告(School Data Returns)」。それに比べ、後者の公立校校長・教師は、7人が9年以上の経験があり、残り1人だけが4年以下である(同報告)。教授経験を積みれば効果的に教えられるわけではないことは明らかであるし、私立校で働く教師は公立校に比べて高給を取っているわけでもない。考えられる要因の一つは、私立校に子どもを通わせることのできる保護者は所得が高く、従って家庭での学習環境がより整って

おり、効率的に学習が行えるということであろう。あるいは、私立校は保護者からの授業料により運営されており、それだけに教師側に責任感と緊張感が生まれるのかもしれない。

5. マドラサ(イスラム学校)の現状

マドラサは、この地域においては、初等レベルのコーラン学校が中心であるが、中等レベルの教育を行う学校も2校ある。ラム市街には4つの公立小学校があるが、マドラサの数は男子用15校、女子用5校程度あり、モスクに併設されている場合が多い。ラムのマドラサは外部者に対しても解放的であるが、これは受講生の95～100%が公立小学校にも通っていることに関係しているだろう。

地域のマドラサ全体を統括しているような機関はないため、マドラサの情報を知るためには個別の学校へ赴く以外に方法がない。県教育事務所はマドラサに関する情報は一切保有していない。比較的大規模なラム市街のマドラサ2校を訪問した。教師とのインタビューおよび筆者らの観察から得られた結果

は、次のとおりである。

マード・サカファ・ムスレム・アカデミー
(Maahad Sakafa Muslim Academy)

ラム島で最大規模の男子マドラサである。寮生が140人、通学生が200人程度在籍している。イエメンからの支援を得て運営している。2階建てで比較的立派な施設であり、図書室もある。寮生のなかには、タンザニアとウガンダからの留学生もいる。教師は20人でそのうち5人は実習生である。低学年の子どもは、ほとんどすべて小学校に通っている。

マドラサは木曜日と金曜日が休みであるが、土曜日から水曜日まで早朝4時45分から夜8時30分まで断続的に授業が行われる。全員がすべての時間帯に出席するのではなく、例えば、平日、公立校に通う1～2年生は、朝6時から7時の間、あるいは午後に来る。

教師の1人オマール氏は29歳である。小学校の1年間だけ公立校に通っていたが、マドラサでは12年間勉強している。従って、スワヒリ語とアラビア語を話し、英語はあまり得意ではない。朝5時から夜の8時半まで断続的に授業を行う。早朝と夜は、昼間に公立校に通っている子どもが主な対象になる。ただし、それほど集中して勉強時間が続くわけではなく、教師がいない時間帯も多い。教師の月給は3,000～6,000シリング程度である。生計を立てるため、副業として小さな店を持っていることもある。

本アカデミーのような大規模なマドラサでは男女別に教育が行われているが、低学年や教室が不足するような場合は、しばしば混合で行われている。マドラサにも学年があり、初級(5年間)、中級(3年間)、上級(3年間)に分かれ、公立校の中等教育までに相当する学習を行う。マドラサの上級クラスを修了すれば、マドラサの教師にはなれるが、積極的にその道に進む者は多くない。

上級の3年生クラスには、当日(2007年1月13日、土曜日)11人の生徒がいたが、彼らの公立校での学習歴は次のとおりである。小学校5年(1人)、6年(1人)、7年(5人)、8年(1人)、中等学校4年(3人)というもので、KCPEを受験する一歩手前の小学校7年生(8年生になると余分に授業料が必要になる)で中途退学、あるいは中等学校まで卒業した者も多い。また、別の日(2007年7月14日、土曜日)の初級クラス2年(34人)の小学校を確認したところ、すべての子どもが公立校に通っており、ラム小14人、アマ小15人、ウィヨニ小4人、シェラ小1人であった。

スワファ・アカデミー(S W A F A Academy)

通常のマドラサのクラス(Non-Secular Class)と統合クラス(Integrated Class)の2種類を開講しており、クウェートからの支援を得ている。この統合クラスは、通常のマドラサと公立小学校の教科内容を統合し、子どもに時間的な負担のないようにカリキュラムを組んでいる。朝8時から午後4時の間にすべての授業を設定している。この統合クラスは2005年に開講し、校長はラム小学校の前校長である。授業は土曜日から始まり、木曜日に終わる。授業料として1学期あたり2,500シリングを徴収している。保護者は商売をしている比較的裕福な場合が多い。現在(2007年)の生徒数は、マドラサクラスに153人(うち女子62人)、統合クラスに112人(うち女子50人)が在籍している。

マドラサ初級クラス2年の男子クラスに当日(2007年1月14日、日曜日)出席していた18人の生徒は、1人が公立校に通学していない以外、アマ小4年生1人、5年生6人、6年生3人、7年生1人、ラム小6年生1人、ウィヨニ小5年生1人、6年生2人、ラムアマニ小5年生1人、ストーンタウン小6年生1人であった。公立校の学年に比べるとマドラサでの学年が低い。このマドラサに最も近

い小学校はラム小であるが(徒歩5分程度)ラム市街の小学校5校に通う子どもが集まっている。

6. キブンガニ小学校とその周辺

キブンガニ小学校は、ラム市街から船外機付ボートで40～50分、徒歩で3時間程度のラム島の西側にある小規模な学校である。ラム島近郊の小学校の中で筆者らの研究関心である伝統的な社会での初等教育のあり方を探索するために最適な学校であり、教師や保護者へのインタビューを始めたところである。この結果は別の機会に報告するが、小学校と村の様子は、次のとおりである。

キブンガニとは、スワヒリ語の米にあたるムンガ(mbunga)からきているとこのことで、この村に最初に住み着いた人々が米を作っていたからだと言う。あたりはマンガローブに覆われ、内陸には砂丘が広がっている。今では漁業とンオンゴ(ng'ongo)という草の織物でベッドや敷物、ロープなどの生産が主要な生業である。主に、男が漁業、女が織物を行っている。村の世帯数は30戸程度である。村には非常に古いモスクと新しいモスクがあり、2つのモスクの建物の間あたりにマドラサがある。小学校は村の北側のはずれにあり、大きなバオバブの木の奥に運動場が広がり、建物は白い石積にヤシで葺いた平屋である。

1977年に2クラスの学校として設立され、村の請願を政府が支援する形で、教師2名、生徒15人で開校した。教師1名は政府派遣の校長であった。その後、しばらくは教員が不足し、3人で7学年担当したこともあった。そのため、午前と午後に分ける2部制や、1教室に2学年の複式授業もやった。1980年代まで、最高でも生徒数は60人ぐらいであった(当時の校長談)。その頃の村の規模は12世帯で、現在(30世帯)の半分以上である。当初、泥壁で作ったような学校であったが、その後、近くの3ヶ所のリゾート・ホテルから支援を受け、徐々に施設の改修が行われた。現在も教師1名の給与(5,000シリング/月)をキジンゴニ・ホテルが負担している。他のラム島の小学校に比べても、教室やトイレなどの施設はかなり整備されている。

キブンガニ小学校生徒数の年次推移は、表6のとおりである。一部の学年に在籍者がなく、変則的な学級編成になっている。2001年7月の調査では、この抜けている学年の生徒は、隣接するマトンドニ小学校に通っている(キブンガニから徒歩1時間半と遠いので親類宅に下宿)との説明であった。このような編成にする理由は、主に教師不足から来ているがそれだけではない。例えば、2007年の8年生がいないのは、2006年のKCPE成績が地区の中で悪く(ラム県63校中50位、アム地区で最下位)2006年の7年生を全員

表6 キブンガニ小学校生徒数の年次推移(2001年および2005～2007年)

年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	計	教師
2001	13(4)	11(3)	13(3)	…	9(7)	…	11(0)	…	47(17)	6(-)
2005	12(7)	13(6)	13(6)	…	7(2)	8(2)	14(5)	…	67(28)	5(2)
2006	12(9)	11(5)	14(5)	13(5)	…	11(3)	7(2)	14(5)	82(34)	6(3)
2007	15(10)	10(8)	12(5)	14(5)	13(5)	…	16(5)	…	80(38)	6(2)

(注) カッコ内、女子(女性)の内数。2001年の教師の性別は不明。2001年数値は7月に現地を確認したもの。

(出所) 2005～2007年は小学校からラム教育事務所へ定期的に提出される学校データ報告書(School Data Returns)の5月分に基づく

留年させたためである。留年に関しては、この他に2006年の1年生男子を2名留年させているが、その他はすべて進級している。

小学校に通う子どもの3分の2は村に住むが、残りの保護者は海岸から離れた内陸部で農業を行っている。調査当日（2007年7月10日および11日）80人（うち女子38人）の在籍者（5月現在）のうち出席を実際に確認できたのは75人（うち女子31人）である。この5月と7月の数値を比較すると男子が増え、女子が減っている。さらに精査すると1、2年生の女子が7月の調査時に「欠席」しており、今後注意が必要である。

2001年7月、自宅の庭で織物をしていた女性の夫の仕事は漁業で、6人の子どもがあり、全員を小学校、うち3人を中等学校まで行かせた。この女性自身は学校教育を受けていない。どの子を中等学校に行かせるかは成績によって考えた。一番下の女の子は、現在モンバサの中等学校に行っているが、小学校からモンバサにある親戚の家から通い、たまたまキプンガニに戻っていた。子どもの時から都会に行っているために、母親の行っている織物はできない。将来の夢はエアーステスである。

村にあるマドラサは、朝6時から7時、14時から15時半、18時半から20時の3部に分かれている。平日、朝の部には学年によらず全員が参加するが、午後の部は学校のない1～2年生だけ、夜の部は3～8年生が通っている。学校のない土曜日と日曜日は終日開かれている。木曜日の朝の午後から金曜日の夜までは休みである。マドラサに来る子どもの全員がキプンガニ小学校に通っているとのことであった。当日（2007年7月11日、水曜日夜）出席者を確認したところ、3年生5人（うち女子1人）、4年生10人（うち女子2人）、5年生9人（うち女子3人）、7年生9人（うち女子2人）であった。小学校3～7年在籍者に対する出席率は60%（女子40%）であるが、村に住む子どもに限定すれ

ば90%であり、ほとんどの子どもはマドラサに通っている。教えているのはアラビア語とコーランである。生徒は手にコーランを持っていたが、実際にアラビア語の読み書きが自由に出来るようになる子どもはごく少数である。

7. おわりに

冒頭に述べた本調査を開始する契機となった研究設問に対する十分な回答は得られていない。データ上の法則性を見つける分析はある程度可能でも、肝心な意味づけや解釈が十分できるまでには、まだ時間が必要である。筆者らは、研究の枠組みをあらかじめ設定し、仮説に基づいて研究を進めるのではなく、柔軟な枠組みのなかで出来る限り生活者の視点から問題点を探ろうとしてきた。それだけに調査の効率は悪く、疑問点は解消することなく、ますます複雑に入り組んだ迷路に導かれるようなことも多い。インタビューなどの質的アプローチを取り入れると、ある一つのリアリティに接近しているつもりが、話を聞けば聞くほど、そのリアリティは一つではなく、論文としてうまく結論がまとまらない。それでも、現地の人々との交流を交えたフィールドワークは楽しいし、そのフィールドは常に新たな研究の視角や視点を教えてくれる。

参考文献

- 澤村信英（2006）「受験中心主義の学校教育 - ケニアの初等教育の実態 - 」『国際教育協力論集』9巻2号、97-111頁。
- Kenya National Bureau of Statistics (2007). *Economic Survey 2007*. Nairobi: Ministry of Planning and National Development.
- Kenya National Examinations Council (2003). *The Year 2002 K.C.P.E. Examination Report*. Nairobi: Kenya National Examinations Council.

- Kenya National Examinations Council (2004). *The Year 2003 K.C.P.E. Examination Report*. Nairobi: Kenya National Examinations Council.
- Kenya National Examinations Council (2005). *The Year 2004 K.C.P.E. Examination Report*. Nairobi: Kenya National Examinations Council.
- Kenya National Examinations Council (2006). *The Year 2005 K.C.P.E. Examination Report*. Nairobi: Kenya National Examinations Council.
- Kenya National Examinations Council (2007). *The Year 2006 K.C.P.E. Examination Report*. Nairobi: Kenya National Examinations Council.
- Ministry of Education, Science and Technology (2005). *Kenya Education Sector Support Programme 2005-2010: Delivering quality education and training to all Kenyans*. Nairobi: MoEST.
- Ministry of Education (2006). 2005 Annual Report, Lamu District.
- Republic of Kenya (1997). *Lamu District Development Plan 1997-2001*. Nairobi: Government Printer.
- UNDP Kenya (2002). *Kenya Human Development Report 2001: Addressing Social and Economic Disparities for Human Development*. Nairobi: United Nations Development Programme, Kenya.